

大東諸島戦時日誌

昭和九年九月

南大東島に海軍飛行場設定。

十八年七月

大城中尉指揮の下に防衛隊が組織される。

十九年二月二五日

米潜水艦、沖大東島(ラサ)を砲撃。

三月十二日

北大東島碇泊中の大仁丸が魚雷攻撃を受け沈没。

二十年一月

十月二四日

島民に被害なし。  
このころからB 29が偵察のため飛来するようになる。  
鮪江連隊の軍旗祭。この日早朝東西滑走路から出撃した陸軍戦闘機が故障のため墜落。  
このころB 29の偵察飛行はげしくなり地上陣地からの対空砲火も一段と熾烈となる。

四月 一日

北大東島にて貨物船南丸雷撃を受け沈没。

七月 四日

歩兵第三六連隊(鮪江連隊)を三三軍に編入。

七月十九日

鮪江連隊主力、大東島に上陸。第一大隊(原少佐)は南大東南地区、第三大隊(吉田少佐)は新東区、第二大隊(須永少佐)は北大東に各々駐屯。続いて海軍部隊、設営隊が来島。島民一四〇〇名に対し軍隊は約四〇〇〇名に達し、島内食糧事情が憂慮されるに至った。

二月十六日

現地防衛召集実施。警備中隊編成。隊長原少尉。この日より警備中隊、棲息壕、戦車壕構築などの作業に従事。

七月二十日

第一回引揚約三〇〇名が東京向け出発

二月十八日

B 24一機、低空で来襲。飛行場付近に爆弾三個投下。地上砲火により撃破。

八月

西港で荷揚中の小型船団が魚雷攻撃を受け沈没、大破。島民の最後の頼みとする米五百石を失う。

三月 一日

大空襲。延九七機。大日本製糖の砂糖倉庫、木工室倉庫など焼失。軍は、戦果、撃墜八機撃破二九機と発表。

三月二十日

このころ軍の指導により義勇団が結成され四団に分れて各々部落の指導に当る。

三月 七日

警戒警報発令。近海に米機動隊蠢動の模様。

三月 三日

B 24、沖大東島に来襲、銃撃。

三月 十日

陸軍記念日。午前八時、グラマン二〇機編隊来襲。第一波、機銃掃射及び焼夷弾投下。第二波爆弾による本格的攻撃。砂糖倉庫に焼夷弾落下約三万俵(一五〇斤入俵)が九日間わたって燃え続け、ガスが発生して近寄れず。鉄道線路上は一面アメの海と化し交通不能となる。

三月 十日

グラマン延六機来襲、爆撃及び機銃掃射。駆潜艇拓南丸が爆撃を受け、飯田大尉他二〇名が戦死。

三月十二日

輸送船団出帆。(十日に入港したもの)

三月 十七日

電探感度によりウルシイ在の米機動部隊北上の算大との報告あり。

三月十六日

空襲警報。二機来襲。

三月 二日

米艦載機二二機来襲。機銃掃射を受ける。この日友軍戦闘機四機、着陸。

四月 一日

写真館、大東寺焼失。  
米機来襲。沖組本島に敵上陸の情報はいる。(嘉手納に二、三個師団。港川に一個師団とのこと)

三月 二日

友軍機四機、出撃。北大東島に米機来襲。

四月 二日

米機来襲、爆撃二回。

三月 二日

早朝より米機来襲。製糖工場、倉庫など焼失。

四月 三日

空襲警報のみ。

三月 二日

米機来襲、飛行場を爆撃。一機撃墜。

四月 五日

米機来襲、午前、午後数回銃爆撃。

三月 二日

米機来襲。観測所、第一農場焼く。

四月 六日

午後、米機百機による大爆撃を受ける。地上建造物大破。

三月 二日

早曉より米機来襲。午前中連続爆撃。

四月 七日

米機七機、来襲。

三月 二日

夕刻、上陸用舟艇二隻を含む三〇数隻の艦隊が塩谷方面沖に出現、七時ごろ照明弾を打上げ約三時間にわたって艦砲射撃。

四月 八日

空襲。秋葉砲台一門破壊。

三月 二日

部隊本部から、敵の上陸算大、婦女子は三日間の食糧を持って新東方面に避難、働ける男子は戦闘に参加するよう指示があった。

四月 九日

空襲、三〇機以上。在所に火災。二機撃墜。

三月 二日

午前四時ごろから砲撃再開。六時ごろ止む。艦船数十隻南西海岸を遊よく。上陸に備え防衛隊、警備隊は弾薬を分配して待機。

四月 十日

第二回目の艦砲射撃を受ける。艦船二八隻、艦載機と緊密な連絡の下に地上の諸施設を次々と破壊。

三月 二日

やや平穏。大型機沿岸を旋廻。情勢の悪化に伴って連隊本部は新東地区の大洞窟に移動。軍旗、御真影も洞窟内に安置。

四月 十一日

連日B 24による空襲を受ける。

三月 二日

午前、米機来襲、銃爆撃あり。午後、ふたたび来襲。延十一機。

四月 十六日

友軍機一機飛来。警報が数回出るが来襲なし。このころより食糧増産のため警備隊員は麦苳りなどに出る。

三月 二日

三月三一日 空襲警報数回、米機来襲二回。学校付近銃爆撃。

四月 十七日

米機来襲、銃爆撃。

三月 二日

午前、米機来襲、銃爆撃あり。午後、ふたたび来襲。延十一機。

四月 十八日

米機来襲、二機撃墜。このころ、連日の空襲の下で、警備隊は自作園の耕作、食器製作、線路補修、便所の設置、漁撈などに従事。

三月 二日

三月三一日 空襲警報数回、米機来襲二回。学校付近銃爆撃。

四月 十九日

西海岸沖方面(沖組本島方面)で艦砲の音が終日

三月三一日

空襲警報数回、米機来襲二回。学校付近銃爆撃。

四月 十九日

西海岸沖方面(沖組本島方面)で艦砲の音が終日

雷鳴の如く轟く。

四月二十日 米機来襲、銃撃を受ける。自作園作業続く。

四月二日 米機来襲、約三時間銃爆撃の後、米艦隊南北大東島を砲撃。艦砲射撃熾烈となり池之沢、在所の杜宅はほとんど全滅状態となる。

四月二日 米機来襲。このころ洞窟内では原因不明の熱病（大東熱）が流行する。

四月二三日 この日より六月九日まで戦況平穩。食糧確保の作業続く。

過去の空襲と艦砲射撃により、住民二名、軍人四〇余名戦死（南大東のみ）。

六月 十日 最後の敵襲。早朝より大空襲、引続き艦砲射撃熾烈、約二時間続く、四二センチ主砲に島全体が震動した。飛行場、杜宅地帯、学校、観測所など破壊状態となる。

この日以後、空襲は漸次おとろえていく。

六月二三日 沖繩本島最終段階に入る。軍司令官以下玉碎との報がはいる。

六月二三日 海軍の食糧輸送のため友軍潜水艦が来航。御真影、書類などを広島へ向け送還する。

七月 一日 艦砲射撃の公算大の情報が流されたが異常なし。

これ以後、砲撃は一切止む。

警備隊、連日、軽機、擲弾筒、肉攻などの訓練

#### 食糧事情と疎開

昭和十八年、十九年ごろまでは大日本製糖会社の専用船で米を移入して会社の売店で売っていたのでそれほど食糧には困りませんでした。船便は内地直通ですから、その頃の食糧事情もやはり沖繩本島とは違って、大東亜戦争は発端からじわりじわりと悪くはなっていました。会社の方で何とか確保されていたわけです。当時砂糖の生産は国策によったものでした。砂糖からブタノールをとっていました。だから、米は会社から買うようにして、さつまいもは家畜を養うために少しはつくりましたが、あまり多く作らないように制限されていました。とにかくお国のために製糖をやろうという意気込みですから、食糧は民間のたくわえとしてはありませんでした。主食として麦をつくったのは終戦直後で、戦時中は味噌用のほかは作っていません。ここはずっと最後まで砂糖だけです。

十九年の三月ごろ、北大東の燐鉱船（大仁丸）が魚雷を受けて沈没した。南大東には加納丸が就航していましたが、これは大日本製糖の契約船でした。大東島へは、東京から大東へと、東京から大阪、門司、大東という経路がありました。大日本製糖は東京に本社があって、大阪工場と、門司に第二工場がありましたからそこに寄港してくるわけです。沖繩に行くのは、その頃年に一回ぐらいで、ほとんど内地でした。この船が、軍に徴用されて、やがて日糖の船は途絶してしまふわけです。加納丸が疎開船の最後の船になり、その後大東島は戦時体制に入るわけです。

私（菊池）の姉さんが帰ったのが最後の船でしたので十九年の七月ごろだったと思います。最後の船が来たとき、原先生の奥さんが

を行い敵上陸に備える。

八月十六日 詔書伝達式（無条件降伏）。三か月に及ぶ洞窟内の生活からふたたび地上生活へ移る。

八月十七日 警備隊、分隊戦闘訓練。午後、自作園耕作。

八月十八日 勅語伝達式。

九月 一日 兵器返納完了。守備隊、解散。

九月 米軍占領部隊進駐。武器弾薬海中投棄。北、秋葉、南の高低の海面砲陣地、北海岸、南海岸の野砲陣地など各砲台陣地爆破。

十二月二六日 航空母艦カツラギが来航、陸海軍将兵と住民の一部が本土に引揚げる。鯖江連隊は南北大東島駐屯の間総計一二二名の戦没者をだした。

（警備中隊々長原少尉の陣地日誌による）

#### 南大東島の戦時状況

字旧東 松田秀夫（八歳）現旧東区長

字在所 宮里清一（九歳）生徒

字在所 西浜良修（二二歳）教員

字南 沖山淳一郎（三十歳）防衛隊員

字在所 菊池密井（十四歳）生徒

（本文は右五氏の座談会をもとに南大東村の戦時状況をまとめたものである。）

はるばるやってきたんですが、上陸して、荷物もほどこないで、そのまま帰らなさいと云われて、泣きながらひっ返していきました。この第一回の引揚者が約三〇〇名ですが、そのあとはもう軍用船ばかりです。十九年の春の製糖はやったんですが、これは積出しができず、砂糖はそのまま、空襲で大部分焼けてしまったんですが、この砂糖でずいぶん助かりました。会社の船便がなくなつてからは、軍の食糧をもらって適当にやっていました。特別食糧生産がありましたが、空襲がはじまって、そんなに作る余裕もありませんでした。家畜を養うためにデンプンがありましたので、その頃の貴重な食糧となっていました。米はまったくなく、軍から分けてもらう程度でした。

戦前大東には四千五、六百名の人口がありました。そのうち、最後まで島に残ったのは千四百名ですから、疎開者の数は三千二百名ぐらいになります。軍命で、年寄、婦人、子供はなるべく疎開をしてくれときていました。行く先は、自分の本籍地とか、船団によっては九州の大分とか宮崎などでした。会社の人たちは皆自分の故郷へ帰るわけですから、引揚げという感覚で内地に行きました。強制疎開ですから、残っている者はわずかです。

疎開船は船団を組んで二回きました。十・十空襲のとき、ちょうどこの疎開船団が奄美大島の沖で空襲を受けて沈没しました。船は古仁屋に乗客を降ろし、乗客は山の方に逃げていきました。二隻は無事乗客を上陸させて、一隻は沈没しました。

私（菊池）と父は島へ残って、家族は無事疎開しました。九月の第二回目の疎開で、軍用船の船団で行ったわけですが、これがちよ

うど奄美大島で空襲にぶつかったわけです。母などの話によりまずと、船団はいったん沖繩に向い、そこから北部へ行って、奄美大島の名瀬に寄港して、そのときに危険情報はあって、船団を組み変えて、警戒態勢をとりながら敵の目をくらますためにいくつにも分れて出港したのですが、名瀬を落して二時間後に空襲でやられたそうです。船は沈まずにヨタヨタしながら何とか陸にのりあげて、みんなは上陸して山に避難していったそうです。その時の犠牲者は五、六人ぐらいではないかと思えます。疎開が沖繩よりも早いということとは、軍が相当はいつてくるという予定があって、最初から軍命です。あなた方は帰りなさいと半分は強制で追い出したわけですね。もうひとつは、籍が向うにある人が多かったからでしょうね。籍が向うにない人を強制疎開させようとしても、そう早くはいかなくなりました。

球部隊が十九年の四月に来て、七月には疎開がはじまったわけです。十八年には大城中尉がきて、私(沖山)らも防衛隊に現地召集されました。ですから、部隊が入ってくるのはわかっていました。そうすると、人口と食糧の問題がでてきます。民家でも、「あしたから使うから出て行きなさい」と云ってきました。当時は一億一心で総力をあげて戦時体制に協力するという情勢でしたから、そう云われても別に文句も云わず、「どうぞ、使いなさい」というぐあいでした。

残った各家庭では、非常用の食糧確保とかいうのはやっています。味噌などは自給でしたのでたくわえはありました。堀も島内で炊いていましたし、購入することもできました。野菜類は夏まあって、部隊の野戦病院に一般住民も収容されることもありましたが、そこでは米のかわりに乾パンを炊いておかゆがわりにすらすらしていました。

米は、徴用されて以後は軍からの配給がありましたが、ほとんどは貯えにして、ふだんはさつまいもや代用食で食いつないでいました。農家も、軍と一緒にさつまいもや野菜づくりをやり、家畜なども獲っていました。土地の者は畑仕事に慣れているので、自活班では彼らが指導者になって一緒に畑を耕やしていました。

住宅はたいへんなもので、ちゃんとした家は軍にとられてしまつて、私(松田)たちは小さな物置小屋に入れられていました。兵舎といつても民家を徴用したもので、強制疎開というものもそういうところからきたんでしょう。徴用作業は自活班のほかに飛行場建設などもありました。

私(宮里)の家は陸軍の管轄地区でしたが、その前に航空隊が家をとってしまいました。それで、航空隊は陸軍とは違って別に兵舎をつくって、民間の家はとりこにしています。他所では、わりかし他の人たちよりはよかったです。他の所では、住家をとられて、家族は物置や畜舎を改造して寝とまりしていました。二十年の三月ごろまではそうやって、第一回の艦砲が始つてからは洞穴に避難しました。陸軍管轄の洞穴があって、航空隊とは分れてそこで生活していました。この洞穴には、陸軍の方から毎日のように人数を調べにきました。もっとも、その時分からは、役に立たない女、子供は洞穴に行き、手伝いのできる者は全部軍の手伝いをしていたと思います。父や姉たちも手伝いをしていたと記憶しています。私

野菜などはなく、ナス、ヒヨウタン、キャベツなど作っていました。多くは、カズラの若い葉が野菜がわりになっていました。お酒はアルコールでした。こちらでは砂糖からアルコールを和水してお酒にするんです。水で割るんで淡い味でした。煙草は十六年から十七年頃、配給制になり、十七年以後、戦時中は配給もありませんでした。だから、みんな自家製の煙草を作っていました。昔から農家の人たちは葉煙草を巻いて、税関もいるのですが、隠れてすつたりしていました。それでしたので、煙草はどうにか喫えました。それから、軍から仕事をしたりした後に煙草をもらえました。まきは豊富にありました。水は戦前から古い水タンクに天水をためて使用しています。壕生活はいつも壕の中にかくれていたわけではなく、空襲警報が鳴る時にかくれるわけですから、水は各家庭のタンクからドラム缶に入れて馬車で壕に運搬してきて、普通生活は家でしています。ので壕の水がきれいということはありませんでした。

ラジオは、東京からのNHK放送で聞きました。学校で放送を聞いて、先生がかり版刷りにして、ちよと新聞みたいに住民に流していました。戦時中の電波も東京からキャッチして、十二月八日の大本営発表もここで聞きました。電気は会社の従業員とか在所一帯の家に入っているだけで、一般の人々はランプで生活をしていました。

船が戦時体制でストップして一番困ったのは病人が出たときでした。戦前には会社経営の病院があり、外科、内科、産婦人科の各医師が三名いました。内地までいなくても盲腸手術もできたから今よりもよかったです。戦時体制になってその医師が引揚げてしまいました。

(宮里)たちは無邪気に遊んでいました。男の人たちは自活班とか漁撈班とか、女の人では炊事、洗濯など、手伝いのできる者は全部でいました。工場が正式に閉鎖されたのは空襲で焼けてからです。十九年の春まで操業して、後十・十空襲がはじまって、工場は焼けて、二十年の春には製糖はできませんでした。閉鎖ではなく操業停止でした。会社はキビ代の支払いは最後までやっています。積出しができなくなつて残った砂糖はおおかた焼けてしまいました。会社は砂糖を各部隊に売りつけて分散していました。焼けたのもあります。それは軍への協力と安全を保つためだったでしょう。会社はバックが大きいから軍からだいぶもらっていたようです。会社がひきあげた後は、残っている社宅の人たち(会社員)は畑も何もないので軍に頼らないと食べていけなかったようです。軍から配給が少しずつありました。

大東で軍と民間のトラブルが少なかったというのは、ひとつには離島ということと、また、民間人にも軍隊にも本土の人が多かったせいだと思います。現に、私(西浜)の先輩もここに来ていて、おかげでだいぶたすかりました。

私(松田)の家族は兄弟が多くて、軍から強制疎開の命がきたわけですが、船がいっぱいで乗れない。次の便まで待ってください、次の便まで待ってくださいとやっていると母は話していました。私たちは家は軍にとられていますが、食糧は何とか島内で求められました。でも、疎開していった人たちは、知らない土地で食べ物には

たいへん困ったそうです。

当時、旧東部落から疎開をしなかったのはごくわずかです。部落に残って住んでいたのは三世帯だけでした。食糧事情を考えてみんな疎開したのだと思います。残った人々はみんな軍の自活隊(班)で仕事をしていました。会社が閉鎖されてからは、畑は砂糖キビをとばらって芋やカボチャや麦、野菜畑などに変わりました。水稲はやっていません。自活隊の全耕作面積は、中隊ごとに分けて、およそ中隊でどれくらい必要かというのを見通した広さでした。終戦になって軍の作った芋や野菜がある程度民間の人の助けにもなりました。終戦直後、島に残っていた住民は一、四六四人でしたが、自活隊のおかげで、沖繩にくらべると生活は楽ではなかったかと思えます。

私(沖山)は設営隊の防衛隊員だったので、会社の長屋をこわして、壕を掘って、彼ら(球部隊)に与えました。その時は大工なんかはみんな徴用されて陣地構築の作業をやらされていました。ピロウとか松とか、木材は豊富にありました。ピロウ樹は防風林としてありましたが、陣地構築のために使いたし、乱伐で、文化財(天然記念物)としてのこるものもだいぶ失われました。社宅で空家になっているところはこわして材料として使いました。民家を兵隊が占領して、住民は洞窟で生活しているのもありました。

## 部隊

この島に部隊が来たのは、最初は昭和十六年ごろで、海軍の飛行場を建築したわけです。作業人夫として朝鮮人がたくさん来島しま

大東、ここには二個大隊がいました。島内を各中隊が分けて直轄にして、徴用とか訓練とか自活班など各中隊ごとに行っていました。

このほかに、防衛隊が組織されましたが、これは沖繩の防衛隊などとは違って遊撃隊のような性格をもっていました。これが組織されたのが十八年の夏ごろです。私(沖山)も現地召集でこれに入れられたわけですが、大城中尉とほか二人が組織したもんですから大城隊と呼ばれていました。

私(沖山)はちょうどこの三人がのりこんできたときに門司から船が一緒だったんですよ。「どちゅうからですか」ときくと「久留米」とだけ答えました。「どちらへ行くのですか」ときくと「大東」とだけ云っていました。名前をきいても答えず、それ以外は絶対に云いませんでしたので、何んで大東に行くのかなあと不思議に思っていました。ところが、船が那覇に寄ったときに、さっと船をおりて上陸してしまいました。「ふしぎだなあ。ほくでさえも那覇はわからないのにとこへ行くのかなあ。」と云っていると、波止場へ帰ってきて沖繩語でベラベラやっているので、沖繩の人だなあとわかったわけです。また船へ乗りこんできてやっぱり大東へ行くというんです。後で聞いたら、名前は大城中尉と、越来さん、比嘉さんの三名で、特命を受けてきたということでした。大城中尉は東風平の人です。大城部隊は球部隊と少し関係はしていましたが、牛島中將のひきいる三三軍の直属ではなくて、大本営直轄の部隊でした。

大城隊は中隊と同じ規模で、私たちは正式に召集されて入隊したわけです。武装もしています。訓練は球部隊から毎日二人の将校が来て戦闘訓練を受けました。敵が上陸してくるとか、戦車があがっ

した。慰安所もあり、慰安婦が六人ぐらいいました。毎日トウガラシを取りにきたので覚えています。慰安婦は朝鮮人のほかに沖繩本島から来た人もいました。

工事は、海軍の警備隊のほかに、軍属の土木関係の人たちもまきいて、警備隊が朝鮮人労務者を指揮して働かせていました。こちらの青年団も動員されて、そのほかにもだいぶ多くの人たちが飛行場設営に出ています。

飛行場は、球部隊がくる前は、東西コースだけでできていました。攻撃には使ってなく、連絡とか、たまに不時着するときなど使う程度でした。爆弾なども置いてなくて、航空基地という機能はなく、中継所というようなもので燃料補給はやっていました。特攻機が一、二機きたこともありますが、目的地まで行けなくて不時着してきたようです。

飛行場には本格的な航空隊は別に配置されていませんでしたが、十七、八年ごろからはしょっちゅう敵の定期便がやってきました。定期便というのはアメリカの偵察機のことです。こちらには航空機そのものはありませんが岩隊という航空隊がありました。球部隊が来てから(昭和十九年四月中旬)、飛行場は南北コースと、ずっと奥にもう一つ、三コースの滑走路に拡張されました。飛行機はそんなにないが、上陸されれば飛行場は米軍に利用されるということは当然わかっていますから、防備はわりと嚴重にやられていたわけです。

球部隊は大隊ですが、そのあとから、十九年の七月ごろ、三六連隊がやってきています。三六連隊は歩兵三個大隊できて、一個は北

てくるときのことを想定して、爆薬や機関銃の操作などやりました。短期間にいろんなことをやりました。まだ軍隊に行っただけのことのない人が多かったのです。在郷軍人なんかよりはもえていたようです。全員兵舎に寝泊りして週に一度は家に帰れました。空襲とか忙しい時のほかには家族とも連絡できました。だが、主な任務は、豊部隊の援助が必要だということで、部隊の壕を掘ったり、雑役係みたいな仕事が多かったです。大城部隊は八月十五日まではそうやって部隊に協力しました。八月十五日になって武装解除してから家に帰されました。

住民は大城隊とは関係なく、軍のサイレンやラッパの相図で避難するだけでした。一般住民の竹槍訓練とか、住民組織というものはありませんでした。ただ、学校には一人だけ配属将校がきていて、青年団とか在郷軍人の訓練はやっているようでした。沖繩のような防衛隊というものはありませんでした。会社にだけは団体を組んで協力していました。

## 空襲と艦砲

戦艦の話にはいろいろありますが、私(西浜)が深く印象に残っているのは燐鉱船の大仁丸がやられたときです。十九年の三月ですね。そのとき、大仁丸は南大東の亀池港に避難していたわけです。港に避難すると荷揚げができないから、朝、会社から電話がきて、荷揚げをやるから向う(北大東)へまわせと云ってきて、合図をして錨を上げたらんだそうです。

私(西浜)が学校へ行くこうして役場の踏切りまで来たとき、ガンとい

う音がするので、会社でボンベか何かやりそこねたのかと思っていましたら、そのときやられていたんです。南（大東）と北（大東）の間で、北寄りのところで、潜水艦がうようよしていたわけです。そんなことも秘密だったと思います。何も知らないでやられてしまったんです。

私（菊池）は当時五年生でしたが、学校は十九年の夏休みまでは普通に授業をやっていました。六、七月ごろだと思えますが、ちょうど園芸の時間で芋畑にいるときにB29の偵察機が来て園芸の間を中止したことがあります。偵察機は十・十空襲まえに何回も飛んできています。定期便と云っておりました。弾を落とすことはしないで偵察だけしていくんです。島の三か所に高角砲陣地があって、そこから飛行機をねらって射撃するんですが、向うは一万余千メートルも上空を飛んでいるので届きませんでした。あるとき、私たちは海で釣をしていたら、その高角砲からの弾がまっすぐ上にあがって、そのまま海にチャボンと落ちてきてびっくりしたもんです。

十・十空襲など沖組を攻撃するために、向うでは空中からよく調査していたと思います。島は緊張していて、定期便がくるたびに警戒態勢にっていました。向うから空襲がこなくても空襲警報を出して皆壕にかくれていました。

私（菊池）は、十・十空襲の日は、戦争のことなんか何にも知らないから、普通通りカバンをしょって学校へ行っていました。飛行機が来たので、いいところへ来たなあと喜んでいたら、いきなり空襲がはじまってどきもぬかれた状態でした。どうやって家に帰ったかも知りません。学校で避難訓練なんかやっていましたが、実際

た。最初、敵艦だとは思わず、最後の決戦で味方の艦隊が来たのだと思っていました。

七時ごろから照明弾がうちあげられて、その後三時間猛烈な艦砲射撃が続いたんです。艦載機が空から照明して島全体が明るくなりました。このころは、もう味方の陣地は空襲でたたくられて、抵抗もできないくらいになっていました。艦砲が始まってから、島じゅう避難しました。住民には三分の食糧をもって洞窟壕に避難するようという命令が出ました。部隊は壕にかくれて反撃もできない状態でした。艦砲は飛行場に集中していました。東西にのびた大きな滑走路が完成していましたが、これが一回も使わないうちにめちゃくちゃにされていました。今から考えると米軍は沖組に行く前にまずこちらの飛行場を使えないようにして、それから沖組に集中しようとしたんでしょうね。後でアメリカの将校が云っていましたが、南大東島には特攻機が四〇機ばかり待機していると考えていたようです。実際には飛行機は一機もいなかったんです。同じアメリカ将校の話ですが、米軍は沖組本島を先にやっつてから九月一日に南大東へ強行上陸しようという作戦だったらしいです。本土上陸の拠点にするつもりだったんでしょう。だから、日本が八月十五日に降伏したからわれわれの命は助かったんだなあと思います。

ところが、軍の命令ではその次の日に上陸は必至ということでした。実際、海上には上陸用舟艇がきているわけです。軍の命令では、働ける男は戦闘に参加し、婦女子は新東方面に避難せよということだったんです。部隊ではその夜酒を出して最後のサカズキをあげました。艦砲は十時ごろいったん止んで、四時ごろからまたはじま

その場に立たされたらおろおろしてしまいました。その後、学校は危険だということで、学校近くの松林の中に机をもって、学年ごとに山の中で授業をやるようになりました。

私（西浜）たちがいた独身宿舎が最初の空襲で徹底的にやられたのには驚きました。しかし、幸いそのときは警戒態勢で軍旗は移動してありました。宿舎はこっぴみじんにやられて、さらに、私たちが揃ってあった壕は擬装してあったのですがものごと直撃砲が命中してしまいました。道路は五〇キロ爆弾でメチャクチャになっていました。

この日はすぐに警戒警報が発せられ、住民はほとんど壕に避難していましたが被害はなかったんですが、港にいた拓南丸が爆撃を受けて兵隊が二〇名ぐらい戦死しました。

次に激しい空襲を受けたのは二十年の三月十日、ちょうど陸軍記念の日でしたね。朝早く、グラマンが二〇機の編隊できて、午前の第一回は機銃掃射と焼夷弾、午後の第二回は爆弾を投下してきました。この空襲で工場の倉庫がやられて、三万俵の砂糖が焼けてしまったんです。砂糖が燃えているんですね。酒そうにもガスが発生して近寄れない状態なんです。そのうち砂糖が溶けだして、アメのように流れだして、一面アメの海ですよ。線路まであふれだしてきて、鉄道が動けなくなりました。あれからずっと燃え続けて九日間ずっと燃えていました。

いよいよ艦砲がきたのが三月二十七日です。夕方に塩谷方面沖に艦隊が現われて日が暮れて夜になってから艦砲が始まったわけです。

私（沖山）が海の方の陣地に行ってみたら四二隻の軍艦がいま

り、いよいよ夜が明けたら上陸だろうと思っていたら、六時ごろ、艦隊は沖組方面へ立ち去ってしまいました。この島は、地形が上陸には不適だから、上陸するには相当の犠牲が出る、それでいったんはあきらめたのだろうという見方をしました。

この艦砲があつてからはずっと自然壕にかくれていました。壕は何百という数ありましたから自分らの近くの壕に隠れていました。それからは空襲はほとんど毎日のようになりました。四月十日には第二回目の艦砲があつて、宿舎とかそのほかの施設を吹き飛ばしていききました。ちょうど沖組本島がやられているところでした。沖組本島方面から雷の音のように艦砲の音が聞こえてきました。日本の艦砲がきて戦っているのだろうと思っていました。

三月から四、五月まではずっと壕生活でした。栄養失調と壕生活で皆顔色が青白くなっていました。

五月ごろからは空襲もなくなり、そろそろ壕から出てきて自活班の作業になります。戦争は勝っているんだろうと思っていました。それで、毎日食糧増産で追われていたわけです。

八月十五日の降伏はラジオで聞きました。大城隊はこの日のうちに武装解除して解散になりました。米軍が来島したのは九月になってからですが、島外との連絡はまったくないし、島には軍民あわせて五、五〇〇名（島民一四〇〇名）もいますから、占領がおくれたおかげで、食糧不足でかえって苦しい状態になりました。

さいわい、島民でこの島で戦死したのは、金川助作さんと喜納信さんのふたりだけで済みました。